

## 南部のアダム

### —Eudora Welty の *The Ponder Heart* におけるイノセンス—

中 良 子

#### 要 約

Clement Musgrove (*The Robber Bridegroom*), George Fairchild (*Delta Wedding*), Jack Renfro (*Losing Battles*) など, Eudora Welty の作品に登場する主要人物は, いずれも彼らの「イノセンス」が強調されている。この事実については, 従来取り立てて議論されることはほとんどなかった。しかし, アメリカ南部ミシシッピ州を舞台にした物語を書き続けてきたウェルティが作品中に「イノセントなヒーロー」を登場させたことは, 彼女の南部に対する歴史意識を探る上で重要な意味を持つものであるといえる。ウェルティの描く「イノセントなヒーロー」とはどのような人物形象なのか。この問題を考察する上で重要になってくるのは, いわゆる「アメリカのアダム」像との関わりである。アメリカ的進歩から取り残されたフロンティアとしての南部, 罪と恥の歴史をもつ南部においてアダム像はいかなる変容を遂げるのだろうか。本稿は *The Ponder Heart* (1954) を取り上げ, Uncle Daniel に体现されるイノセンスの分析をとおして, ウェルティの描く南部のイノセンスを 50 年代の歴史的な文脈において考察した。その結果, イノセンスとは南部の物語を語る視点であることを明らかにした。

キーワード: ユードラ・ウェルティ, 『ボンダー家の心』, 南部, イノセンス, アメリカのアダム

#### I はじめに

ユードラ・ウェルティの文学において「イノセンス」が重要な概念であるということは, 従来ほとんど議論されることはなかった。しかし「イノセンス」は, ウェルティの南部観を説明する鍵として考察される必要があると考えられる。

WPA 時代の写真を収めた写真集『ある時ある場所で』(1971)の序文で, ウェルティは, 当時の彼女自身の南部を捉える視点は「完璧なイノセンス」だったと述べている<sup>1)</sup>。イノセンスであったからこそ撮ることができた写真, それはニューディール政策のプロパガンダの対象であった貧しい南部の中に潜む, 政治的主張から解放された「イノセンス」を捉えていると言えるものだが<sup>2)</sup>, それがウェルティの作家としての基礎を築くことになった視点であるならば, 彼女のいう「イノセンス」は詳細に検討されるべきである。しかも「イノセンス」はその後, 作品の登場人物に継承されていくからである。ウェルティの作品には, 語り手となる(主に女性の)「傍観者」<sup>3)</sup>と彼女らに「観察される」(主に男性の)ヒーロー的存在の二つのキャラクターの相互関係で物語が展開するというパターンがある。そのヒーロー的人物として、『泥棒花婿』(1942)のクレメント・マスグローヴ, 『デルタの結婚式』(1946)のジョージ・フェ

アチャルド、『負け戦』(1970)のジャック・レンフローなどが挙げられるが、その人物形象において、必ず、彼らがイノセントであるということが述べられているのである。

『ボンダー家の心』(1954)のダニエル・ボンダー(ダニエル叔父さん)もこれらのイノセントなヒーローの一人に加えることができる。むしろ最もそのイノセンスが強調され、彼のイノセンスが作品のテーマそのものとして描かれているといえる。この作品は、ダニエルについて語るエドナのサザン・トークの効果と相俟って、イノセンスのテーマゆえに、いかにも南部的な、祝祭的なコメディとして、ブロードウェイの舞台や、ジャクソンでは地元出身の作家を祝う演劇としても親しまれてきた<sup>4)</sup>。しかしそこで問題となるのは、他の作品と違って、本文中でダニエルがイノセントであると形容されることはないという事実である。ダニエルの言動からいわば状況証拠的に、彼のイノセンスは暗黙の了解として認められてきた<sup>5)</sup>。ウェルティの南部を捉えた視点が、作中、中心人物に託される時、どのようなものとして描かれるのか。『ボンダー家の心』が最も直截的にイノセンスのテーマが描かれる作品と見なされているのであれば、今一度、従来無批判に論じられてきたダニエルのイノセンスを精緻化することが必要ではないだろうか。

ウェルティがこの作品を執筆していた頃、南部は「第二次再建時代」といわれる大転換期を迎えようとしていた。それは、ウェルティが「生涯で唯一の」公的な政治活動、1952年の大統領選での民主党候補アドレー・スティーヴンソンの応援にのみり込んでいた時期でもあった<sup>6)</sup>。人種統合への動きに対する保守勢力の抵抗が激化する中、ウェルティは南部の人種政策を嫌悪し、故郷を去ることを真剣に考えていたという<sup>7)</sup>。そして1954年のブラウン判決の半年前に、『ボンダー家の心』は発表されている。このような状況で創出されたダニエルという、南部のイノセントなヒーローとはどのような人物形象なのだろうか。

この問題を考える上で無視できないのは、いわゆる「アメリカのアダム」像との関わりである。偶然にも、『ボンダー家の心』が出版された翌年、文学研究におけるアダム像の原型を提供するR.W.B.ルイスの『アメリカのアダム』が出版される。奇しくも同じ時期に浮上したイノセンスのテーマに照応性はあるのだろうか。本論は、ルイスの提示する「アメリカのアダム」に、ダニエルを「南部のアダム」と措定して、再文脈化することを試みたい。ルイスの『アメリカのアダム』は、冷戦期に経済的・物質的繁栄の陰で進歩という概念が様々な角度から問い直される中での、フロンティア神話再考の産物と位置づけられる。南部の50年代もまた公民権運動へとむかっていく中で、人種差別の過去が問い直される時期であった。アメリカ的進歩から取り残されてきた南部におけるイノセンスの意味を、『ボンダー家の心』に描かれた50年代の「南部のアダム」の位相に探ることで、ウェルティの南部を捉える視座を明らかにしたい。

## II 1950年代のアダム

「アメリカのアダム」は、「新しいエデン」である新大陸への入植とともに生まれたアメリカ神話の起源である。新しいアダムは、荒野を開拓する無垢な自然人であると同時に理想の文明社会の建設者でもある。大きくて強い肉体を持つ開拓者は反知性主義の表れでもあり、また進取の気性を持つ成功者でなくてはならない。自然と文明の矛盾の上に成り立つヒーローなのである<sup>8)</sup>。このヒーロー像は、F.J. ターナーのフロンティア仮説やチャールズ・ピアードの産業的フロンティアの思想の中に受け継がれていく。フロンティアは、ヨーロッパの否定としての例外的なアメリカ観に基づいた、無限の可能性をもつ空間としてのアメリカという思想である。それは、現実のフロンティアが消滅した後にも、産業化による進歩の果てに、時間と変化のない、自然と調和した楽園が実現するという矛盾に満ちた神話を形成した<sup>9)</sup>。

このようなフロンティア神話が歴史家の批判にさらされるようになるのが50年代である。その中でアダム像を再定義し、文学的テーマとして適用したのが、ルイスの『アメリカのアダム』である。ラッセル・ライジングは、ルイスをライオネル・トリリングらと同じ反革新主義派の歴史家と位置づけ、その歴史観を「進歩」への深い懐疑主義だと解説している。そして彼のアダム論を、冷戦期の宗教的状况——科学的思考の不毛性への気づきから起こった信仰復興——との関連から、未来が脅かされていた時代に「使用可能な過去」を発見しようとする試みだと論じている<sup>10)</sup>。

ルイスは、「現代の状況」を論じたエピソードにおいて、「アダムとしてのアメリカ人は、ラオコーンとしてのアメリカ人に置き換えられてしまった」と嘆く<sup>11)</sup>。ルイスは、冷戦期のアメリカが「冷たい懐疑主義」、「新しい絶望」の状態にあると捉えている。懐疑主義は、イノセンスの主張の矯正策を越えて「原罪崇拜」に堕してしまい、「経験不信」を表明する。「我々の時代は」希望を持とうとしない「防御の時代」であるとルイスは述べている。「新しい可能性を将来に期待せずに、われわれは疲れきった注意を、歴史の重荷にむけているのだ」と<sup>12)</sup>。この硬直した状況から解放してくれるのが、「喜劇的あるいはアイロニックな見通しのうちに」アダムの伝統を描く小説の活力であるというのがルイスの主張である<sup>13)</sup>。

ルイスはアダムをめぐる「対話」を次のように再構築している。時間と伝統から切り離された「空間のヒーロー」であるアダムについての、原罪を否定し未来を信じる「希望派」と原罪説を信奉し過去を振り返る「追憶派」の議論の間に、「アイロニー派」と呼ぶ陣営が存在すること、彼らはアダムに「幸運な墮落」が必要であると主張していると論じた。すなわち、世界や人間性の悪を知る経験を通して人間性の善はさらに高められ、「希望派」の希望は完成するということなのである<sup>14)</sup>。絶望の時代のアダムは、「墮落」を「幸運」なものとする信じることのできる「経験」を積んでいかなければならない。それが「アメリカ的経験」となり、「伝統」を作り上げていくのである。

ルイスの50年代の時代認識に基づく「幸運な墮落」説を、ライジングは、「直線的に途切れなく連続する進歩という革新主義派のモデルの代わりに…アンビグイティとパラドックスとアイロニーを特徴とする」歴史のモデルの提出と見なしている。アンビグイティとは進歩からの逸脱ではなく「経験の規範」である<sup>15)</sup>。ニュー・クリティシズムの用語を彷彿とさせる歴史観に基づいたルイスの時代認識は、南部の歴史意識と重なり合うものがある。ルイスが見て取った「絶望感」は、アメリカ的進歩に取り残されてきた「遅れた南部」が味わってきた挫折感に通じるものではないか。

アメリカのフロンティア神話は、北部が西部に見た夢であり、そこから南部は除外されていた。「イノセンスと成功と繁栄の遺産は北部エリート白人のもの」だというのが一般的な理解である<sup>16)</sup>。それは南部植民地が描いた田園の理想が、ルイス・P・シンプソンのいうように「奴隷の庭園」であったからであろう<sup>17)</sup>。

W. J. キャッシュが「南部の精神」はプランテーション貴族の騎士道精神ではなくフロンティアの精神だと論じる際にも、その負の空間性が強調されている。キャッシュは、フロンティアの無秩序・暴力・偏狭さといった、ターナーの強調したアメリカ的美徳に反する暗い面に注目し、それらの要素が南部においてはプランテーション制度によって強化されていったと論じている。さらにキャッシュは、南部には新たなフロンティアが存在すると言う。一つは南北戦争後に「ヤンキーが創ったフロンティア」である<sup>18)</sup>。社会的・経済的荒廃というフロンティアでの経験は南部人の精神に決定的影響を与えた。社会的動揺と貧困と暴力の一方で、南部人は「失われた大義」を掲げて「防衛機構」を強化し、過去へのロマンティックな郷愁をつのらせて南部の神話を作り上げたのである。貴族趣味でありながら暴力的でもある「野蛮な」南部文化の基礎はこのフロンティアで生まれたという。そしてもう一つは、20世紀に入って産業化がもたらした「進歩」という第三のフロンティアである<sup>19)</sup>。「進歩」が意味するものは個人により広く機会を開放することであるはずだが、しかしそれも南部では、結局はプランターをモデルとする、貧しい者からの搾取の手段としてしか機能しなかったとキャッシュは述べる。進歩のフロンティアは、一部の白人に聖域を与えただけであり、しかしその白人たちを含めて、決して南部は豊かになりはしなかったという。南部のフロンティアは、白人支配者階級の「野蛮人の理想」を形成し、エリートが支配する南部社会の貧困を作り出すものであったという。

南部のアダムが現実世界で「幸運な墮落」を経験し、アメリカ的経験に参入するとしたら、過去の罪を改め、防衛機構を解き、産業主義の進歩を受け入れ、未来への限らない進歩というアメリカ神話を共有しようという、新南部運動が提唱した新南部の神話を信じることなのだろうか。あるいは、あくまで進歩を拒絶するアグラリアンたちのような主張を貫くことなのだろうか。

シンプソンは、南部の文学的精神はアメリカの神話に奴隷制を取り込もうとした試みの挫折に始まる疎外の文化を形成したと論じている。その疎外の文学的精神が、科学主義・産業資本

主義に現れたグノーシス的現代精神への抵抗と連動して、歴史と記憶の回復を求め過去の意味の再建を試みる、1920年代から50年代のいわゆるサザン・ルネッサンスの営みとなって開花したのである。しかしその「宗教的探求」ともいえる試みにも挫折することになる<sup>20)</sup>。記憶と歴史の崩壊は南部の喪失を意味するが、しかしその喪失の経験から、戦後の南部文学は、記憶と歴史の集合体に個人の存在性を求める活動へと移行していくのだと述べている<sup>21)</sup>。すなわち、グノーシス社会と実存的自我の葛藤が、サザン・ルネッサンスそのものの喪失をも示唆する、50年代以降の南部文学の精神なのだという。この自我の葛藤が「南部のアダム」の経験となりえるのではないだろうか。

ルイスが懐疑主義に満ちた「防御の時代」に希望を見出したのは、「アダムの伝統の痕跡」を描いた小説の活力だった。それは「全世界を向こうにまわした、単純で純粋な自我」の十分な可能性の実現のために闘うヒーローの物語である。「経験を可能にし、それによって物語の行為を可能にする、希望に満ちた傷つきやすい人生観」を「アイロニーとドラマによって」描くことがこの時代の文学の功績なのだという<sup>22)</sup>。アダムは「幸運な墮落」を経験し、「言葉の創始者」という役割を間接的に再与されることで、希望と救済のヒーローとなり得るのである。このことは、アダムのイノセンスを、言葉を語る様態に関わる概念として捉え直すことができることを示唆している。

ウェルティは、アメリカの文化的フロンティアの向こう側の空間、バーバラ・ラッドの言う「空っぽの、収奪された広大な空間」<sup>23)</sup>である南部のフロンティアに、アダムのヒーローを登場させた。以下、『ボンダー家の心』のダニエルを、人種と階級による暴力と貧困という墮落をすでに経験している南部の、人種問題においても大きな変革を迎えようとしている50年代の進歩のフロンティアに創出された「南部のアダム」として捉え、彼のイノセンスが、南部の物語の創造にいかに関わってくるのかを見ていきたい。50年代の進歩の概念を問い直すことで、矛盾をはらむフロンティア神話のアダム像を再構築したルイスの「幸運な墮落」を経験した「言葉の創始者」という概念は、アメリカの進歩に取り残された南部におけるイノセンスを考える上で、有効な枠組みを提供してくれるだろう。

### Ⅲ 進歩のフロンティアのアダム

物語の舞台、ミシシッピ州クレイの町は、キャッシュのいう「進歩のフロンティア」である。ボンダー家は最上流階級のプランターの家族で、今も広大な敷地に大勢の黒人・白人の使用人を抱え、「クロイツスくらいに大金持ち」<sup>24)</sup>の町の名士であるが、既に崩壊の運命をたどりつつある。屋敷には「祖父」(ダニエルの父)とダニエルが黒人召使いのナルシスと暮らし、他の家族はみんな町を去ってしまい、町の中心にある祖母の遺産のホテルを経営する独身の姪のエドナが一家の遺産相続人の「最後の一人」であることが何度も強調されている(342)。

人々が都会へと出て行き、クレイの町が「墓場のように」寂れてしまったことは (340)、町にハイウェイが通り、電気が引かれたことなどとあわせて、戦後の大きな変化にさらされる南部スモールタウンの状況を正確に伝えている。さらに、「世の中には気前のいい性格を利用してやろうという人がいて、銀行もサインとか証言とか馬鹿らしいもののために、彼らがよそ者であろうが何かたくらんでいようが、尊重しないわけにはいかないのだ」と言う祖父の心配は (343)、この土地が、南部の戦後経済システムの中で北部資本に搾取されつつあることを示している。そして、町外れの丘の上の屋敷で電気も引かず避雷針を建て、頑に前近代的な暮らしを守っている、シアサッカーのスーツにパナマ帽とステッキという典型的南部紳士の祖父は、古い南部の秩序を体現する人物として描かれる。

このような「フロンティア」に登場するダニエルは、作品の冒頭でエドナによって次のように紹介される。「私の叔父のダニエルは、あなたの叔父さんみたいな人よ、あなたに叔父さんがいらっしやるならね——ただ、ひとつ弱点があってね。人づきあい大好きで、夢中になってしまうのよ。」(339)そしてその「人づきあい」として、誰にでも贈り物をするという話が続く。彼が知的障害者であることも暗示されており、50歳になる彼の幼児性を示すエピソードが次々と語られてゆく。歳の違わない姪のエドナは、ダニエルを守ることに「生涯をかけて」おり、度々繰り返される「この世で最も優しい、汚れない心」、「優しい、愛情に溢れた心」、「お行儀のいい (good as gold)」紳士という描写とともに、イノセントな「共同体の子供」<sup>25)</sup>のような存在というダニエルの人物像を作り上げていくのである。

ダニエルのイノセンスの根拠とも見なされる特質が、人に贈り物をするということでは重要である。跡継ぎのダニエルが誰彼無しに贈り物をする行為は、一家の莫大な財産を浪費し続け、ボンダー家の崩壊を加速させるものだからである。したがって、物語の前半は祖父とダニエルの葛藤が中心に描かれる。財産を守ろうとする祖父は、ついに彼を懲らしめるため精神病院に入れてしまう。しかしダニエルは「逆襲」する (345)。一時外出から祖父に送られて病院に戻った際に、間違えて祖父が病院に収容されてしまい、その間にダニエルは家に帰ってしまうのである。そして帰り道で立ち寄った10セント・ストアで働くボニー・ディー・ピーコックを一目見て、「僕は誰も住んでいないものすごく大きな家と、お父さんのスチュードベイカーを持っているんだ。おいで、結婚しよう」と言って結婚してしまうのである (352)。家に戻ってそのことを知った祖父は心臓マヒで死んでしまう。ダニエルの「逆襲」は、結果的に父親を殺してしまい、世代交代を果たす。田舎町の貧しい家から出てきた17歳のボニー・ディーとの身分違いの結婚は、ボンダー家の財産と家柄を捨て去る、大きな変化をもたらす行為である。これによってダニエルは、ルイスの定義する「歴史から解放された個人、幸いにも祖先を失い、家柄や種族につきものの遺産には心を動かされず、またこれに汚されてもいない」アダムとなるのである<sup>26)</sup>。

祖父とダニエルの関係は、しばしばアポロとディオニュソスとの対比で捉えられてきた。確

かにこの喜劇の源泉は、祖父（あるいはエドナ）に表される秩序・知識・経験とダニエルの自由奔放な生命力との葛藤だともいえる<sup>27)</sup>。それは社会的成熟とイノセンスとの衝突と言い換えることもできよう。しかしそれ以上に、二人の対比は新旧の価値の対立と見るべきであろう。ダニエルのイノセンスは、ポンダー家を崩壊に導く新しい価値を志向し、進歩のフロンティアにおいて新しい経験を受け入れるものである。

「ものごとを変える」ことができる人だと紹介されるボニー・ディーは、散髪が上手で、ダニエルを別人のように変身させてしまう。ダニエルはそのような「変化」をもたらすことのできる彼女を「誇りに思っ」ている（359）。しかし二人の結婚は必ずしも幸せとはいえない。ダニエルにとってボニー・ディーは妻というよりは法的な契約者であり消費者である。彼女は「試験結婚（marriage trial）」としてダニエルと結婚し、その結果5年半で出て行ってしまふ。しかし「別居扶養手当」を過去に遡って支払う裁判所令を条件に戻ってくるのだが、次にはダニエルを追い出してしまふ。別居後、ダニエルからもらうお金で物を買集め、電気のない屋敷に洗濯機や電話などの最新電化製品までも備えていく。テッド・オーンピイは、ミシシッピでは経済の問題と人種概念は混ざりっていると指摘しているが<sup>28)</sup>、ボニー・ディーは、「奥様ごっこ」を楽しみながら（374）、有り余る物を黒人召使いのナルシスにも分け与えて友情を築くようになる。ブラノン・コストロは、彼女の消費主義のイデオロギーが「南部の階級制度をものともしない態度で、人種と階級間のコミュニケーションの道を開き、頑な人種についての社会的習慣からの自由の可能性を提供する」と論じている<sup>29)</sup>。

ダニエルは、新しい時代の価値観を体現するボニー・ディーに徹底的に拒絶されてしまふのだが、ようやく会うことができた嵐の日に彼女は亡くなり、その殺人容疑で訴えられ、本物の裁判（trial）へと発展するのである。この結婚は、法律によって彼のイノセンスが裁かれる試練の経験（trial）となるのである。裁判では、エドナや町の人々がダニエルを守ろうとするにもかかわらず、ついに黙っていられなくなったダニエルが自ら証言台に立ち、ボニー・ディーを愛していたと証言した後に、ポンダー家の全財産をばらまき、大混乱のうちに無罪判決が言い渡される。しかし、裁判で全財産を失ったダニエルは、屋敷を出てエドナの経営するホテルに暮らすようになる。以前のように訪ねてくる人はなくなり、二人はすっかり疎外された状況に置かれてしまふ。「彼はもう楽しくないんです。空っぽの屋敷、空っぽのホテル、町も空っぽになればいいのよ」とエドナは嘆く（422）。イノセンスを獲得するものの全てを喪失してしまふダニエルの「経験」は、いかなる「幸運な墮落」と理解すればいいのだろうか。

「人にあげるもので一番悪いものはお金です、ダニエル叔父さんはだめでも、私はそのことを学びました。あげた方ももらった方もなぜかそれで終わりにになってしまうのです」とエドナが語るように（419）、お金という「禁断の木の実」に手をつけてしまふダニエルの「樂園追放」の物語なのだろうか。南部共同体の素朴なイノセンスと消費主義の対立を読み取ることもできよう。しかし、そのことに気づいているのはエドナであってダニエルではない。「君は裁判所

で僕のことをばかにしたね。でも気にしてないよ。僕は変わらない、ずっと同じままだよ。君はボニー・ディーほどにはばかにしなかったから」とダニエルがいうように(422)、これはイノセンス喪失の物語ではない。裁判で証明されたダニエルのイノセンスをどのように理解すればいいのだろうか。その曖昧さの根拠はどこからくるのだろうか。

#### IV 南部のアダムのイノセンス

『ボンダー家の心』は、1953年に『ニューヨーカー』に発表された直後から舞台化の話が持ち上がり、1956年にブロードウェイで初演されているが、その時の脚色は、ダニエルのイノセンスの解釈について興味深い問題点を示してくれる。劇ではダニエルが裁判でお金をばらまくシーンはない。ニューヨーカーには賄賂としか理解されない、というのが理由だった。その代わりにダニエルは次のように証言する。

[自分がみんなにどう見られているのか] わかっています。僕はずっと人生を踏み外してきました。ご覧の通り、僕は働かずにのらくら暮らしてみんなの邪魔をしている。みんなは苦労して働いて、成功を求めてどんどん前へ進んでいるのに。立派な人物になろうとしているのに。ああ、僕は、まるで人生は大きなパーティで僕はその招待客みたいに、笑って冗談を言っていた。お父さんがあんなにお金を残してくれたのが間違いだったんだ!…僕には持ちきれない重い荷物だ、これ以上持っているつもりはない。僕は放棄する、たった今、この場で!<sup>30)</sup>

「贈り物をする事で罪を償うのは遅すぎますぞ、ミスター・クロイソス。告白の方があなたの魂にはよいのでは」と言われて、ダニエルは訴答を無罪から有罪へと変更する<sup>31)</sup>。それは、ボニー・ディーがダニエルの腕の中で心臓マヒで亡くなる時、彼女の心は彼への愛でいっぱいだったから、つまり、彼への愛のために亡くなったからである<sup>32)</sup>。

お金より愛が大事というセンチメンタルなメッセージを込めて、見事なまでにアダムの「幸運な墮落」のドラマに作り替えられている。ダニエルはイノセンスを捨て、冷静に自己分析する理知的な人間に生まれ変わっている。ニューヨークの脚本家が南部のアダムに求めたものは、過去の負の遺産を捨て、罪を悔い改め、勤勉な労働者となって、未来へ前進するアメリカの成功神話に加わることだった。

エドナや祖父が守ろうとしたダニエルのイノセンスは、金銭と性に対するイノセンスだという指摘がある。例えばマイケル・クレイリングは、エドナのドラマティック・モノローグの喜劇性は、ダニエルの抑圧された性的欲望という悲劇性を覆い隠そうとする語りの葛藤から生まれるものだとして述べている<sup>33)</sup>。シーマンとウォーカーにも指摘するように、ダニエルの女性に対

する態度に倒錯的なセクシュアリティを読み取ることはできる<sup>34)</sup>。さらにコストロは、ダニエルがお金をばらまいた行為は、南部プランテーション制度の歴史を、すなわちポンダー家の財産は「南北戦争の時に綿花畑を焼き払わ」ず、戦後は松材を「ヤンキーに売って」築いたという事実を町の人に改めて思い出させることになり(418)、再び階級の分断を作り出してしまったのだと分析している<sup>35)</sup>。

確かにウェルティは、キャッシュウラの南部論のイデオロギー上、最も罪深い存在であったはずのプランター一家に、一種、超越的にイノセントな人物を存在させ、内部からその価値を解体させているといえる。ではダニエルのイノセンスは、富とセクシュアリティというプランターの罪の象徴なのか。ダニエルの行為は贖罪行為なのか。このような読みは、ダニエルの贈り物(お金)を与える行為が、代償に愛情や利益(無罪)を求めるためのものであるという、ブロードウエーの脚本家と同じ解釈に結びつくものではないだろうか。

もちろんウェルティはブロードウエーの脚色に不服だった。劇のテクスチュアがあまりにも薄い、ダニエルのイノセン스와共同体の視点をもっと注意深く作り上げる必要があると脚本家に手紙を書き送ったという<sup>36)</sup>。何よりも語り手としてのエドナが、一登場人物になってしまっていることが問題だった。「ダニエルの世界は、彼を育て、守り、楽しませ、そして彼に責任を持つのです。その姿勢は全てエドナ・アールに体现されています」と書いている。ウェルティは、彼のイノセン스에理性的判断を加えずに許容する南部共同体こそを提示しようとしていたことがわかる。ダニエルのイノセン스는共同体の中で人々との相互関係の上に構築されているものだからである。ウェルティの「南部のアダム」は、南部社会を建設する者ではなく、南部に創られたアダムである。ダニエルのイノセン스의意味は共同体との関係において探る必要があるといえよう。

ダニエルのイノセン스에理性的な判断を下してしまう批評の傾向は、彼のイノセン스의根拠として、作品の冒頭に語られる彼の「ひとつの弱点」という贈り物をする行為のみに捕われすぎているのではないか。弱点はイノセン스의本質ではない。そこで従来注目されることなかった、ダニエルのイノセントな性質を表すもうひとつの重要な要素に目をむける必要がある。ダニエルが「人づきあい大好き」というのは、実はまず贈り物をする前に、話をするのである。「知らない人を見つけるのが何よりの楽しみなの。相手に口を開かせません。ダニエル叔父さんはいつだって話をする準備万端でいたのですから。」(345)さらに、「何があっても私たちはいつだってダニエル叔父さんがいてくれるのがとても楽しいのです、彼の方も私たちをあてにしているのです。実際、彼は楽しむことを決してためらいませんでした。でも話することがない時は、ちっとも楽しくないのです」と言われるように(372-73)、ダニエルは話をするという行為によって、自分自身の人生を楽しみ、町の人々に受け入れられているのである。彼の話は、贈り物とは違って必ず人々に喜んで受け取ってもらえるものなのである。エドナのホテルには、毎晩のようにみんながダニエルの話を聞くために集まり、「豪勢な眺め」を

呈していた。彼の話は、「聞き方を知っている」町の人たちとの共同作業でもあった(364-5)。

ダニエルにとって、お金も本当の愛も、どこか雲の上にあって夢見のような、現実感のないものであったのに対して(363)、彼の話はしっかりと現実の共同体の中に存在する物語なのである。みんなに話をするために「常に事件の中心にいたい」と望んでいたように(373)、現実世界での「体験」なのである。祖父への「逆襲」の話やボニー・ディーに逃げられた「悲しい身の上話」(364)など、彼の「体験」は物語として語られる。話をするという行為に共同体の中で作られ守られてきた彼のイノセンスの表出を認めることができる。ダニエルの南部のアダムとしての役割は、話を、言葉を語ることなのである<sup>37)</sup>。

ダニエルのイノセンスと話をするとの関係について、エドナは次のように説明している。

愛を量ることができるのかわかりません。どんなに大量の愛があるのかは神様しかご存知ないでしょうけれど…ダニエル叔父さんを見ていて思うのは——彼は本当にたくさんの人を愛することができるのよ——もし、心に決めた人が、自分の愛に返えてくれなくても…それでも愛をどこかに積み上げておくことができるってこと。叔父さんがしたことは、ただ、周りの人に、男にも女にも子供にも、さっさと彼の愛を与えること。愛！いつも愛を欲しがる人はいるものよ。叔父さんはそのことをわかっていたの。…そしてあの時は、彼はそれを話しをすることで与えたのでした。クレイでは手近に相手がいまいた。彼は、私がビューラ・ホテルに入れた人は誰でもまっすぐに心に受け入れました。「やあ、こんにちは。」そうして始めるのです。話をですよ。(374)

ダニエルにとって話をするとは、贈り物をあげることと等しく、愛を与える手段なのである。それは、話すことがたくさんある時はあまり贈り物をしなくなる(345)ということからもわかる。彼の話はいつも「真実」であり、「嘘をついたことがなかった」というように(345)、ダニエルの話には歪んだイノセンスを読み取ることはできない。そしてボニー・ディーとの結婚が一方的な「経験」にしかならなかったのは、彼女が彼の話は何の「人間らしい好奇心」も示さなかったからである(373)。

ダニエルが法廷でお金をばらまいたのは、彼にとっては最高の舞台で事件の真相を、ボニー・ディーをいかに愛していたかを話そうとして、エドナに止められたからである。「話してはだめ、ダニエル叔父さん！誰も信じないわよ。…もうたくさん！」(413)もう話す必要はない、誰も聞きたくはない——そう言われて、ダニエルは言葉を失ってしまい、話の代わりにみんなにお金を与え、彼の愛を、イノセンスを示したのである。

この作品がダニエルのイノセンスについての物語だという時、それは贈り物騒動についての話だからではない。物語を語ることについての物語だからである。ダニエルのイノセンスは言葉を語る行為に深く関わるものである。

裁判は、他所の町からやってきたボニー・ディーの遺族とダニエルを守ろうとする友人たちとの争いをクレイの町の人々が見守る「カウンティー・フェアのような公共の見せ物」<sup>38)</sup>となるが、それは物語の対決である。グラドニー判事がシェイクスピアの古典『オセロ』の物語になぞらえてダニエルの妻殺害のドラマを推理すると、エドナとナルシスは雷の火の玉がボニー・ディーを襲ったという南部特有のトール・テールで対抗する。

そしてダニエルのイノセンスを問う裁判の争点となったのは、まさに彼の言葉の意味をめぐるものだった。グラドニー検察官がダニエルを殺人罪で訴えた根拠は、彼がボニー・ディーに送った伝言、「僕を帰らしてくれなくちゃ、ぶっ殺すぞ」という言葉を（386）、文字どおり脅迫の意味に取ったからだった。しかしそれは、祖母の口癖を受け継いだだけで、キャッシュの言う「野蛮な」文化を持つプランター一家で日常茶飯事に交わされる言い回し、すなわち共同体の言葉だった。弁護士やエドナたちは、その言葉は「何も意味しない」のだと弁明する（402）。

ダニエルの伝言自体に意味がなかったとしても本当に死んでしまった場合はどうなのか、と質問されたエドナは、「みんな悲しみます」と答える。それを裁判官が「それでもなお、[その言葉は]何も意味しない」という証言に変更して記録した時、エドナは次のように付け加えた。

もちろん、愛の意味はあります。話し方によるのよ。言葉に意味を込める方法に。人によっては脅迫になりますが、他の人には詩にもなり得るのです。（402）

この物語の主題である裁判の鍵となる言葉、ダニエルの言葉は、愛だったのだと主張するエドナ。そしてその言葉は、「完璧にイノセントな言葉」だったと認められる（397）。前述したように、作品中ダニエルについて語られる時、彼に「イノセント」という形容詞が使われることはない。唯一、彼のこの言葉が、イノセントだと言われるのみである。このことは、ダニエルのイノセンスの本質が彼の言葉にあることを示している。ダニエルのイノセンスとは、愛を持って言葉を語る力だったといえる。

語られなかった事件の真相とは、ダニエルが雷に怯えるボニー・ディーを笑わせようとくすぐった結果、彼女は、文字どおり「笑い死に」(tickled to death) してしまったのである。ウェルティは、プロットの展開上、ダニエルにボニー・ディーを殺させてしまっているのかを悩んでいたというが<sup>39)</sup>、この殺害方法を思いついたのは、この言葉に「大喜びする」というもうひとつの意味があったからであろう。最後にダニエルとボニー・ディーの間にささやかな愛情の交流があったことを示そうとしたのだと考えたい。

エドナがダニエルに話させなかったのは、「愛の世界で育てられた」彼が人に害を与えるという「真実」を信じたくなかったからだと説明される（416）。エドナがダニエルのイノセンスと彼を育てた自分たちの共同体を守ろうとする行為は、ダニエルの言葉の、共同体外部にとっての意味（脅迫）を否定し、共同体における意味（愛）を信じたかったということである。ダ

ニエルのイノセンスの矛盾は、この言葉の持つ曖昧性からくるものである。言葉の創始者としての南部のアダムのイノセンスもまた「アンビギュイティーとパラドックスとアイロニーを特徴とする」歴史のモデルを提示しているといえよう。

## V 南部のアダムの幸運な墮落

エドナは法廷でお金をばらまくダニエルを見て、次のように語っていた。「そうしてダニエル叔父さんは振り出しに戻ってしまったのでした。贈り物をして恋に落ち、恋に落ちて話をし、話をして持っていたものを失い、失って逃げられ、そして、逃げられたところからまっすぐにまた贈り物をするところへと。」(419) 全てを失ったダニエルが再びこのサイクルに戻る可能性は薄い。ダニエルにとっての一連の経験の意味は、愛情と贈り物(お金)と物語の三位一体の等価性が崩れてしまったことだといえる。すなわち、ダニエルの悲劇は物語の喪失であり、「愛よりも持っていたらよいもの」(367)という聞き手を失ってしまったことである。しかし、これが「幸運な墮落」になり得るとすれば、それはダニエルに代わってエドナが語りだしたことで、彼が再び贈り物をする期待を込めて、ビューラ・ホテルに立ち寄った旅人にむかってダニエルの話を語り直すことにある<sup>40)</sup>。エドナは、全てを喪失してもなお生き残る、物語を語る力を救い出し、ダニエルのイノセンスを再生する救済者としてのヒロインになる決意をしたのである。

ウェルティの作品にはお馴染みの一人称の語り手としてエドナが語る「パフォーマンス・ストーリー」<sup>41)</sup>の魅力は、南部表現をちりばめた語りと言葉遊びのようなおもしろさであり、それは言葉の多義性の上に成り立つアイロニーやパラドックスである<sup>42)</sup>。エドナの語りは、言葉についての物語というテーマそのものと重なり合い、その意味を一層豊かなものになっている。ダニエルの話に比べると、エドナの語りは技巧的にも完成された物語である。それ故、従来この作品については、専らエドナの語りに注目して、その信憑性やドラマティック・モノローグの効果についての議論が主流であった<sup>43)</sup>。ニッセンは、エドナを「信用できない語り手」と見なすよりも、読者は「立ち聞きする者」として、ボンダー家の「最後の一人」である彼女自身が孤独の認識にいたる「衰退」の物語に耳を傾けるべきだと論じている<sup>44)</sup>。ワイナーも、エドナは歴史家であり、彼女の物語は南部のショート・サガであると論じている<sup>45)</sup>。しかし、見てきたように、エドナの語りの主題はあくまでダニエルのイノセンスであって、それは単純にボンダー家の没落と町の衰退を嘆くものではない。エドナはむしろダニエルに協力して「変化」を促進する役割を果たしてきたことは忘れてはならない。

エドナが語る「ボンダー家の心」には二重の意味がある。祖父がダニエルの浪費を心配してしばしば起こす心臓発作について、エドナは「ボンダー家の心臓だわ！(The Ponder heart!)」と言う(348)。祖父の死についても、「それが私たちの心臓なの。私たちは突然終わっ

てしまう傾向があるの、私たちボンダーはみんな」と説明する (358)。しかしダニエルの心臓は、医者から「早鐘を打つ心臓」だと診断されている (370)。ボニー・ディーが亡くなった時にも「ダニエル叔父さんの心臓に追いつこうとしたら、誰の心臓だって衰えてしまう」と言う (423)。祖父とダニエルの対立における二人の心臓の対照は、一家の運命を象徴している。「[祖父がその浪費を心配しても]叔父さんはお構いなしに、この世で一番の善意と陽気な心(heart)で愛と友情を惹き付けていたのです。彼は幸せが大好きだったの！」(343)——エドナはダニエルの「やさしい愛情に溢れた心(heart)」を守るべく、ボニー・ディーとの結婚も全面的に支援したのである (356)。突然終わってしまう心臓と変わらずに生き続ける愛に満ちた心、その両方が時代の変化の核心にある南部の「心(heart)」として提示されているのだといえよう。それは過去を理性的に批判する知的な「精神(mind)」ではなく、未来へと生き延びる物語を語る心である。

エドナにとってダニエルは、「全世界を向こうにまわした、単純で純粋な自我」を持ち、「経験が可能にし、それによって物語の行為を可能にする、希望に満ちた傷つきやすい人生観」を提示するアダムである。エドナによって語られることで、ダニエルの経験は南部のアダムの物語となるのである。但しそれはいかにダニエルのイノセンスを守ったのかという彼女自身の物語でもある。エドナは、本来ダニエルのような町の語り手ではなかった。「彼は誰の話でも勝手にしました。あなたでも、他人でも、月の世界の人のでも。でも私の話はしません。私に物語があるなんて夢にも思わなかったのでしょうか」と言うように (375)、エドナはダニエルが語る話にも決して登場することのない人物だった。エドナが最後にボニー・ディーに対して「いなくなって寂しいわ…どこにでもいるような人だけ」と同情を示すのも (423)、共同体の中での語られない存在という連帯感からに違いない。そして今エドナは、愛情を込めて、ダニエルの物語、ボンダー家没落の物語を語り、その記憶に自ら関わっていかうとする生き方を選んだのだといえる。シーマンとウォーカーも指摘する通り、エドナの語りは、その中で自分が生きる価値のある世界を再創造する行為であり、エドナ自身の救いになっている<sup>46)</sup>。エドナの語るダニエルの物語は、物語の中に語り手自身の存在意義を求めて語り直す、南部のアダム神話のパリンプセストといえる。おそらくエドナは、これからもホテルを訪れる人にこの話を何度も繰り返し語ることになるだろう。過去は物語として生き続け、アダムの「経験」は「伝統」を作り上げてゆくのである。

## VI おわりに——ウェルティの50年代のイノセンス——

進歩への懐疑から新しい絶望の時代にあった50年代、アメリカの神話が見直される中で、アダムの伝統を描く小説に未来の希望と救済が求められていた時、ウェルティは人種問題をめぐる激動の南部でイノセントなヒーローの喜劇を創り出した。アメリカの進歩から取り残され

た遅れた南部は、アメリカ神話の矛盾が最も顕著に露呈された文化的フロンティアであり、特に50年代は人種問題という負の遺産に向き合わざるを得ない時代であった。そのような南部のイノセンスは、罪の歴史と無関係に存在することはあり得ない。ダニエルが「殺人」を犯すように、イノセンスは曖昧なものにしかなり得ない。イノセンスは過去を崩壊させ変化を招くものであるが、楽観的に未来の希望を示すものでもない。それは南部の現実をありのままに捉える視点といってよい。言い換えれば、南部を語る視点はイノセンスでなければならない。その視点をウェルティは、ダニエルの、根底に愛を持った、物語を語る力として描いたのである。さらにダニエルのイノセンスをエドナという語り手に語らせることで、南部のイノセンスを「アンビギュイティとパラドックスとアイロニー」に満ちたものとして描き出すことに成功している。これは決して古き良き過去を懐古するものでも、批判するものでもない。イノセンスとは、エドナが物語を語りながら自己実現を果たしてゆくように、歴史を未来へとつなぐための生命力でもある。それを南部の心／心臓として描き出したのだ。

ウェルティの50年代は、南部の文化的後進性を嘆き、ミシシッピの政治的状況を嫌悪し、隔離政策に反対ではない母親との葛藤に苦しみながら、都会の生活への憧れを強めていた時期だった。それでも結局南部を離れなかったのは、そこに作家としての原点があることを自覚していたからであろう。ウェルティの作家としての始まりは、南部に特有のゴシップに見られる話し言葉の伝統であるといわれている。ウェルティは、子供時代、近所の大人たちが集まって話をしているのに耳を傾けるのが大好きだったという。会話の中に「物語」があること、物語は生き生きとした「場面」の中で起こること、そして場面には人間を知るヒントが隠されていること、それらのことに気づいた「ドラマティックな直感力」が、物語作家への道を開いたのだと述べている<sup>47)</sup>。創作の原動力となった、人々の生活の中に息づいている無邪気な物語が、ウェルティにとっての唯一許すことのできる南部の心だったのではないだろうか。それを南部のイノセンスと捉えたのだと考えられる。

50年代の南部の大変革期にウェルティがこの作品を書いたのは、南部のイノセンスを見失わずに愛を持って書き続けようとする作家の意志表明だったのではないだろうか。その決意がエドナに託されている。ダニエルに南部のイノセンスを体現させ、それを「彼に責任を持つ」というエドナに語らせる時、そこにウェルティの南部作家としての使命感を読み取ることができよう。エドナはダニエルにむかって「私はここにいますよ。今までと同じように、これからもずっと」と呟く(423)。エドナの自己実現としての南部のアダム神話のバリンプセストは、ウェルティ自身の南部の記憶に関わる姿勢の表明であり、南部の神話に対する内部からの抵抗の試みでもあったのではないだろうか。ウェルティが作家の原点となった30年代に発見した南部のイノセンスを再び取り上げることは、ルイスが「絶望の時代」にアメリカのアダムの伝統を求めた姿勢に通低するものだと考えられる。

ダニエルの、愛を持って語る力としてのイノセンスの創出は、南部の人種をめぐる状況に対する、ウェルティの深い怒りの反映であることも忘れてはならない。愛を持って語るという姿勢は、特にこの時代のウェルティにとっては重要な意味を持っていた<sup>48)</sup>。公民権運動の最中に「作家は改革運動に参加すべきか」という問題に対して、作家は作品を書くことで応えるべきだと答えた際に、「私たちは愛を持って書く必要がある…愛によって、まっすぐな怒りを持って書くことができるのである。愛は理解の源泉なのである」と述べている<sup>49)</sup>。ウェルティにとって、愛とは、世界を認識する、政治的姿勢の根源にあるものなのである。その作家のまなざしをイノセンスということができる。

この作品における人種問題を考える際にも、エドナの差別的な発言や前述したボニー・ディーとナルシスの友情関係よりも、ダニエルのイノセンスに注目しなければならない。ダニエルがエドナにも内緒でボニー・ディーへの重要な伝言を頼んだのは、「これほどのろまで、おいぼれで、汚らしくて、間抜けな奴はいないっていう年寄りの黒人」(385) ビッグ・ジョンだった。二人がお互いのことを「大切に思っていた」のは、ダニエルが「お金をプレゼントできるから」というパターンリズムのパロディのような関係だからではない。普段から「彼はビッグ・ジョンが近寄ってきても気にせず、彼の話聞いていました。彼らはよくお互いの話を聞いていました」という関係だったのである(387)。無心に愛を持って語りあえば信頼関係を築けるというメッセージを読むべきであろう。

『ボンダー家の心』は、1970年にジャクソンのニュー・ステージ・シアターによって改めて劇化され上演されることになった。劇団は人種統合されており、統合キャストで上演する準備がなされていた。その直前に、ベトナム反戦運動の学生がジャクソンの人種差別に抗議のデモをして警官と衝突し二人の死傷者が出る事件が起きる。上演するべきかどうか議論され、この劇の上演自体が政治的プロパガンダとなった。そして予定通り行われた公演は、南部の中に文化的エンクレーブが存在することの証明となったのである。ディレクターのフランク・ヘインズは、この作品は今日の人種問題と無関係ではない、「愛について、ダニエルの世界への無限の愛について」書かれているからだとコメントした<sup>50)</sup>。南部のアダムの物語は、70年代になってついにアメリカ神話に再文脈化されるのである。

30年代に初めて知る故郷南部の現実に注がれた、驚きに満ちたイノセントなまなざしは、20年後、厳しく南部の現実を見つめ直す物語作家の視点として完成した。この一見バースクなコメディは、ウェルティの南部観の一つの達成とみなすべきであろう。

## 注

- 1) Eudora Welty, *One Time, One Place: Mississippi in the Depression: A Snapshot Album* (New York: Random House, 1971), 7.
- 2) 拙稿「Eudora Weltyの写真集に見る小説家としての視座」『京都産業大学論集』文化系列第一号(2002)を参照。
- 3) Reynolds Price, "The Onlooker, Smiling: An Early Reading of *The Optimist's Daughter*," *Shenandoah* 20:3, 60-61.
- 4) 地元ジャクソンの劇団ニュー・ステージ・シアターによって1970年の初演以来、1973年5月3日のEudora Welty Dayの制定や1992年の83歳の誕生日、2009年の生誕100年にも上演された。
- 5) 後述するように、ウェルティ自身がこの作品について「ダニエルのイノセンス」という言葉を使って語ってはいる。
- 6) Peggy Whitman Prenshaw, ed., *Conversation with Eudora Welty* (Jackson: University Press of Mississippi, 1984), 226.
- 7) Susanne Marrs, *Eudora Welty: A Biography* (Orlando: Harvest Book, 2005), 231.
- 8) 亀井俊介『アメリカン・ヒーローの系譜』(研究社出版, 1993年), 26-35.
- 9) 大井浩二『フロンティアのゆくえ—世紀末アメリカの危機と想像』(開文社出版, 1985年), 1-10.
- 10) Russell J. Reising, *The Unusable Past: Theory and the Study of American Literature* (New York: Methuen, 1986), 118-19.
- 11) R.W.B. Lewis, *American Adam: Innocence, Tragedy and Tradition in the Nineteenth Century* (Chicago: University of Chicago Press, 1955), 195.
- 12) Ibid., 196.
- 13) Ibid., 196-7.
- 14) Ibid., 7.
- 15) Reising, 94-96.
- 16) Sacvan Bercovich, ed., *Cambridge History of American Literature* (New York: Cambridge University Press, 1994), 313.
- 17) Lewis P. Simpson, *The Dispossessed Garden: Pastoral and History in Southern Literature* (Athens: University of Georgia Press, 1975), 2. シンプソンは、「奴隷の庭園」とニューイングランドの「契約の庭園」がアメリカの牧歌精神における二つの基本類型であると述べている。
- 18) W.J. Cash, *The Mind of the South*, (New York: Vintage Books, 1991), 103.
- 19) Ibid., 195.
- 20) Simpson, 70.
- 21) Ibid., 90, 99-100.
- 22) Lewis, 198.
- 23) Barbara Ladd, *Resisting History: Gender, Modernity, and Authorship in William Faulkner, Zora Neale Hurston, and Eudora Welty* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 2007), 5.
- 24) Eudora Welty, *The Ponder Heart*, in *Eudora Welty: Complete Novels* (New York: Library of America, 1998), 410. 以下この作品の引用はすべてこの版からとし、引用頁数は本文中に( )内に記す。なお和訳は、ソーントン不破直子訳『ボンダー家殺人事件—言葉で人を殺せるか?』(リーベル出版, 1994)を参照させていただいた。
- 25) Gerda Seaman and Ellen L. Walker, "It's All in a Way of Speaking': A Discussion of *The Ponder Heart*," *Southern Literary Journal*, 23:2 (1991), 68.
- 26) Lewis, 5.
- 27) Michael Kreyling, *Eudora Welty's Achievement of Order* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1980), chapter VI; Barbara Harrell Carson, "In the Heart of Clay: Eudora Welty's *The Ponder Heart*," *American Literature*, 59:4 (1987), 609.

- 28) Ted Ownby, *American Dreams in Mississippi: Consumers, Poverty, and Culture 1830-1998* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1999), 3.
- 29) Brannon Costello, "Playing Lady and Imitating Aristocrats: Race, Class, and Money in *Delta Wedding* and *The Ponder Heart*," *Southern Quarterly Review*, 42:3 (2004), 45.
- 30) Joseph Fields and Jerome Chodorov, *The Ponder Heart: Adapted from the Story by Eudora Welty* (New York: Random House, 1956), 174, 175.
- 31) Ibid., 176.
- 32) Ibid., 178.
- 33) Michael Kreyling, *Understanding Eudora Welty* (Columbia: University of South Carolina, 1999), Chapter Six.
- 34) Seaman and Walker, 71-73.
- 35) Costello, 43.
- 36) Marrs, 247. 手紙は劇の感想ではなく第一草稿に対するもの。舞台はそれなりに楽しめたと語っている。
- 37) ダニエルは「一度も手紙なんでもらったことがない」(5) というように、「話し言葉」の人物として描かれている。彼に対立する「書き言葉」の世界に属するものとして、法廷言語を使う検察官、「メモ」「新聞広告」「通信販売のはがき」などでコミュニケーションをとるボニー・ディーが配置されている。
- 38) Rachel V. Weiner, "Eudora Welty's *The Ponder Heart*: The Judgement of Art," *Southern Studies*, 19 (1980), 270.
- 39) Marrs, 226-27.
- 40) アーノルドは、エドナは旅人をダニエルの花嫁候補にしようとして話しているという解釈をしている。Marilyn Arnold, "The Strategy of Edna Earle Ponder," Dawn Trouard, ed., *The Eye of the Story* (1989).
- 41) Lynn Snyder, "Rhetoric in *The Ponder Heart*," *Southern Literary Journal*, 21:2 (1981), 17.
- 42) Brenda G. Cornell, "Ambiguous Necessity: A Study of *The Ponder Heart*," in Peggy Whitman Preshaw, ed., *Eudora Welty: Critical Essays* (Jackson: University of Mississippi, 1979), 209.
- 43) Michael Kreyling, *Eudora Welty's Achievement of Order*; Marilyn Arnold, "The Strategy of Edna Earle Ponder"; Axel Nissen, "Seeing Through Edna Earle: *The Ponder Heart* as Dramatic Monologue," *Southern Literary Journal*, 30:1, (1997)などを参照。
- 44) Nissen, 86.
- 45) Weiner, 268, 272. 他にも Snyder 参照。
- 46) Seaman and Walker, 75.
- 47) Eudora Welty, *One Writer's Beginnings*, in *Eudora Welty: Stories, Essays, & Memoir* (New York: Library of America, 1998), 854.
- 48) 1952年の大統領選でスティーヴンソンを熱烈に支持したのも、対話による協調を重視する政治的姿勢と、情熱的な知性が「詩のように」訴えてくる彼のスピーチの魅力だったと語っている。Michael Kreyling, *Author and Agent: Eudora Welty and Diarmuid Russell* (New York: Farrar Straus Giroux, 1991), 162を参照。クレイリングはスティーヴンソンの敗北とダニエルの類似性を指摘している。
- 49) Eudora Welty, "Must the Novelist Crusade?" in *Eudora Welty: Stories, Essays, & Memoir* (New York: Library of America, 1998), 812.
- 50) Marrs, 349.

## Southern Adam: Innocence in Eudora Welty's *The Ponder Heart*

Ryoko NAKA

### Abstract

Clement Musgrove in *The Robber Bridegroom*, George Fairchild in *Delta Wedding*, and Jack Renfro in *Losing Battles*—the main characters of Eudora Welty's novels are always described as "innocent." This characterization has been hardly discussed. However, it should be remarkable that Welty enters innocent heroes in her stories set in the South, the land of guilt and shame, excluded from the mythology of American frontier. Innocence has been, as a matter of course, an important classical theme of American literature. How are Welty's innocent heroes different from so-called American Adam? Examining the characterization of her innocent heroes leads to clarifying Welty's historical consciousness of the South in the context of American literary tradition. This paper, focusing on Daniel Ponder, the innocent hero in *The Ponder Heart*, investigates what Welty regards as innocence of the South in the context of the 1950s.

**Keywords:** Eudora Welty, *The Ponder Heart*, the South, innocence, American Adam